『ペルレスヴォー』における人物の指示表現について

植　田　裕　志

中世の騎士道物語では好んでいわゆるincognitoの場面が設定される。たとえば武具に身を固めた騎士どうしが，互いに見知っている間柄でありながらそれに気づかずに戦ってしまう場合である。実際に出会わなくとも，人からある人物のことを話されてもそれがすでに自分の知っている人物であるということがわからないというような場合もある。さらにこうした状況が物語の世界のみならず，読者もその中に巻き込んでしまうような場合もある。こうした広い意味でのincognito の状況においては人物の指示表現の使い方が重要になってくる。ある人物に言及するのにたとえば「ゴーヴァン」という名前によるのか，それとも「青色の楯の騎士」という表現によるのか，あるいは単に「ある騎士」とだけ言ってすませるのか，そうした表現の違いによって聞き手にとってはその問題の人物をidentifierするための状況が異なってくるのである。

『ペルレスヴォー』の作者はこうした指示表現の使い分けによって数多くのincognitoの状況を作っている(1)。しかも，この物語では多くの登場人物に名前が与えられているにもかかわらず，名前があるからといって語り手がその名前を指示表現として使って語るとは限らない。たとえばペルレスヴォーの妹についてはプロローグで「ダンドラン」(Dandrane)という名が明らかにされている。彼女はしばしば物語に登場し重要な役割を演ずる。しかし，語り手は「ダンドランは・・・した」と彼女の名前を使えそうな場合でも，「乙女は・・・した」としか語らないのである。

本稿では作者がどのように指示表現を使い分け，名前をどのように扱っているかという点からこの作品の語りのスタイルの性格を明らかにしたい。

物語テクストの研究においては，登場人物をどのような言葉で指し示すかという選択がしばしば小説家にとって重要な問題であることが指摘されている。シュタンツェルは物語の世界に対する語り手の位置を見る時に，語り手による登場人物の名指しに着目している。そうした名指し表現を区別し，語り手の関心を表す形容詞が入った表現(「哀れなストレザー」)，語り手による迂言法（「われわれの主人公」)，名前（「ストレザー」)，そして人称代名詞ではそれぞれ物語の状況に対する語り手の位置が違っており，この順で語り手の位置が後退していると指摘している(2)。またコルブランはクリプキの『名指しと必然性』によってこうした指示表現(désignateurs)を一般的に「固定的な指示表現」(désignateurs rigides，名前，人称代名詞，指

示代名詞）と「固定的でない指示表現」(désignateurs non rigides，普通名詞を含む表現ないし記述(description）とに分けて，たとえば『感情教育』では前者の表現のみが使われるのに対して，『テレーズ・ラカン』では後者の表現も多く使われていることを指摘している[3]。

ただしこうした考察の前提として注意しておきたいのは，指示表現が使われる基本的な前提，コミュニケーションの場というものである。話者が聞き手に対してある人物を指示するときに使う表現はその時の状況に応じて話者によって選択される。物語のテクストの場合ではこの話者と聞き手の状況がまず登場人物相互の間にあり，次に語り手と聞き手（読者）との間にある。そしてさらに付け加えるならば，読者が物語の登場人物に言及する時には，その場合はこれら二つのレヴェルとはさらに違うレヴェルの状況にある。たとえば，ある物語の中で主人公の小さな男の子が，他の登場人物たちからは「エミール坊っちゃま」あるいは「エミールさん」(monsieur Emile)という表現で指示され，語り手は登場人物たちの口からは出てこない「ミルウ」(Milou エミールの愛称)で彼をよび，そしてここで使ったように読者は新たに「主人公の小さな男の子」という言い方で指示することができるのである[4]。

また指示表現の分類については『ペルレスヴォー』独特の問題点がある。ひとつには『ペルレスヴォー』では名前というものが曖昧である。そもそも中世の写本では固有名詞を大文字で表記するという習慣がない。「ペルレスヴォー」のような固有名詞でさえも写本では<perlesvaus>あるいは<.per.>や<.p.>のような省略形で表記されている[5]。そこでこれらを"Perlesvaus"と改めて校訂版を編むのが校訂者の仕事となるのだが，そうなると<la demoiselle du char>(荷車の乙女）のような場合にそもそもこれを名前とみなすのかどうかの判断が微妙である。『ペルレスヴォー』の校訂本の編者ニッツェはこうした型の表現をしばしば固有名詞として<la Demoiselle du Char>のように表記し，校訂本につけた固有名一覧表（TABLE OF PROPER NAMES)でもこのかたちでとりあげている。さらには中世フランス語のアーサー王ロマンに出てくる固有名詞をあつめたウェストも『ペルレスヴォー』からとる場合はニッツェの一覧表をそのまま利用しているように思われる[6]。本稿でも表記についてはニッツェに従うが，ニッツェの表記がつねに妥当であるかどうかは微妙である。そこで指示表現の分類では名前と固有名詞とを区別して考え，<la Damoiselle du Char>と<Perlesvaus>とは別の範疇として考えることにする。

もうひとつの問題点は「ヨゼフス」(Josephes)あるいは「物語」(le conte, l'histoire)という語り手の扱いである。というのも，このロマンス語の物語が，ヨゼフスなる者が書いたラテン語の書物の翻訳であるということがテクスト自体に書き込まれており，物語の途中で「ヨゼフスは次のように証言している・・・」とか「物語は次のように言っている・・・」と長くはないものの注釈めいたものがしばしば入るからである。語り手の存在というものが曖昧なのである。空しい議論の錯綜を避けるためにここではまずこうした「ヨゼフス」や「物語」なるものの存在を無視して考えることにする。

そこで指示表現を次の四つの型に分類して考えてみよう。

(1)代名詞（人称代名詞，指示代名詞）

<il>, <le>, <celui-ci（"cil"）>など

(2)不定冠詞つきの名詞句

<un chevalier>, <une demoiselle de grande beauté>など

(3)限定詞（指示形容詞，所有形容詞，定冠詞）つきの名詞句

<ce chevalier>, <sa mère>

<le chevalier>, <le jeune ermite>

<le chevalier à l'écu d'or>または<le Chevalier à l'Ecu d'Or>など

(4)固有名詞

<Perlesvaus>, <Dandrane>など

指示表現に代名詞が使われる時は，それが誰を指すのかコンテクストから明らかである場合であるのはもちろんのことである。コルブランの用語に従えば「前方照応的」(anaphorique)な表現ということができる[7]。いちいち名前をあげずに代名詞を使うのは言語表現の経済性によるのであり，語りにおいてはそのテンポを早くする効果がある。二人の登場人物の間の対話の場面ではある台詞がどちらのものであるかは話す順番から明らかであれば代名詞さえも使われない。

これに対して不定冠詞表現は対照的にそれまでのコンテクストとはまず無関係に人物を新たに指示ないし提示する場合に使われる。コルブランの指示表現分類ではこの型はとりあげらていないが，ここでは他の型の表現との比較から，またincognito の状況設定で重要な表現と思われるので取り上げることにした。この型の表現は騎士が冒険の途上で出会う場面を語る時にしばしば使われる。たとえばゴーヴァンがはじめてジョゼウスに会う場面では「ひとりの若者に出会う」("encontre un vallet" 1.1619) と語られる。こうした型の表現で指示された人物は読者にとってはそれがすでに物語に登場したり，話題になったことのある人物であるのかどうかはわからない。またゴーヴァンの方がこの若者をどのようにidentifierしているのかもわからない。しばしばその場面の会話や語り手の言葉によって，読者にはそれがすでに出てきている人物であるとわかるが，ゴーヴァンにはそのことがわからないという状況が語られる。たとえばランスロに恨みを抱く乙女の場合を見てみよう。ランスロはこの同じ乙女に二度三度と出会いながらそれに気づかない。

i) まずランスロはある礼拝堂で「ひとりの騎士を葬っている乙女をみつける」("et trove une damoisele qui ensevelissoit un chevalier" 2815行)

ii) 二度目にランスロが会うときは「大急ぎでやって来る乙女と小人に出会う」("et encontre une damoisele et .i. naim qui venoient grant aleüre", 3830行)

iii)次にはカルドゥイユでの騒乱を知り宮廷に戻る旅の途上で,「ある騎士と乙女の姿を認める」("si consuï .i. chevalier e .i. damoisele" 7355行)

iv)そしてまた彼女はランスロもいるアーサーの宮廷にも現れる。「そこへとても美しい乙女が現れた」("Atant es vos une damoisele de molt tres grant biautē" 8168行)

v)その冒険の最後,ランスロは「危険の城」にやってきたところで彼女に出会う。「アーサー王の宮廷にいた乙女が彼を迎えた」"La damoisele qui fu a la cort le roi Artus li vint a l'encontre" 8451行)

この最後の定冠詞つき表現では,読者は確信をもってそれが例の乙女であると断定できないが,すでに出てきている乙女であることはわかる。

これは作者によるincognitoの状況設定の典型的な例である。読者にとっても登場するたびにはじめはこの乙女が何者ものかわからない。しかし作者は一方では読者に彼女の正体を明かし,他方ではランスロにはそれが分からないという状況を続けることによって,ランスロを見下ろすような位置において読者を楽しませる。またこうした乙女がいるからこそ,他の乙女たちについても読者は新たに一人登場するたびにそれがすでに出てきていたのではないかと一瞬疑うことになる。

さらにこうした表現によって読者もまたこのランスロと同じ立場におかれる場合がある。たとえばペルレスヴォーを探すゴーヴァンの冒険の一場面である。ゴーヴァンはペルレスヴォーがそれまでの盾のかわりに赤い十字の印のあるヨゼフの盾をアーサー王の宮廷から持っていったことを知っている。そしてある騎士に出会う。

> 大きな戦闘馬に武具で身を固め,緑の十字の印のある金色の盾を頸にかけた騎士に出会う("voit .i. chevalier armé sor un grant destrier, et avoit. i. escu d'or a son col a une croiz vert" 4249行)

この騎士がペルレスヴォーであると読者にわかるのはゴーヴァンが次に一人の乙女と出会い,そしてある騎士の城で宿をとり,次にひとりの隠者と出会う場面のことである。この場合,しばらくの間読者はこの騎士がペルレスヴォーとは違う騎士であると思いこまされるのでる。

三番目に限定詞つきの名詞の型をみるとこの型は一方では代名詞の場合と同様に,コンテクストとの関係でanaphorique に使われている。「この騎士」(ce chevalier)とか「彼の妹」(sa soeur)の型の場合は代名詞に近いといえる。従って読者にとって誰をさすのかは明らかである。ひとつだけ例を挙げておく。さすらうペルレスヴォーがヨゼフの盾をもつ騎士(すなわちペルレスヴォー)を探している妹のダンドランに出会う場面である。「ちょうど昼どきに彼はひとりの乙女の声が聞こえた・・・」("Il entr'oï endroit l'eure de midi une demoisele qui..."4959行)。この乙女の嘆きの内容から読者はこの乙女がダンドランヌであるとわかる。そして出会い

の場面の終わりでは次のように語られる。

> ペルレスヴォーは彼女が妹であるとよくわかった，しかし自分の正体を明かすことは望まず，心に抱いたあわれみを表に出すことも望まなかった。彼は乙女が馬に乗るのを助け，一緒に馬を進めた(”Perlesvaus set bien qu'ele est sa suer, mes il ne se velt encore descouvrir, ne mostrer par dehors la pitié que ses cuers a. Il aide la damoisele a monter, puis chevauchent ensenble. 5027行)

ペルレスヴォーにも読者にもその乙女が彼の妹であることがわかっているにもかかわらず，ここで最後に使われている指示表現は「彼の妹」でも「ダンドラン」でもなく，「乙女」というのが興味深い。それはおそらくこの場面の前でも，そしてこの後ペルレスヴォーと別れてからもそうであるが，ペルレスヴォーの妹が母と離れて旅している間は「乙女」(la demoisele)という表現が使われている。

そもそも中世のこうした騎士物語に登場する人物といえばまず「騎士」，「王」，「奥方」，「乙女」，「小人」，「隠者」，「若者」などといった決まった一組のカテゴリーのどれかとして認識され，その前提に立ったうえで個人が区別される。そこでこうし名詞を含む指示表現は固有名詞とならんで多く使われる。たとえばゴーヴァンとジョゼウスの最初の出会いの場面では，語り手はジョゼウスを指す際に，ゴーヴァンと区別する必要があれば「若者」という言葉を使う。したがって同じ定冠詞つきの語り手による指示表現といっても，この作品の「若い隠者」(le jeune ermite) と近代小説の「若者」(le jeune homme)とでは事情が違ってくる。近代小説で「若者」と言う時には，まず名前をもった個人という認識の前提の上で，いわばあえて語り手がそう言い換える，そこにシュタンツエェルは語り手の関心を見るのだろうが，この中世の物語では個人よりまずこうしたカテゴリーの認識の方が先なのである。まずそうしたカテゴリーがあって，それから名前で区別されるのである。

この定冠詞つき表現にも面白いincognito の状況描写の例が見られる。ゴーヴァンがヴェルメル・ランドの騎馬試合で，自分の探しているペルレスヴォーと戦う場面である。

> 「彼は彼が探している騎士の姿が見えるものと思った。しかし彼にはその姿が見えないように思えた。というのも彼が持っているような盾がそこにまったく見当たらなかったからである。・・・　彼が探している騎士は戦列の先頭におらず，多勢どうしの戦いの只なかにあった・・・。彼はその騎士の姿を目に止めた。彼はそれがだれかまったくわからなかった。といのも彼が別の印をもった白い盾を持っていたからである」(cuide voer le chevalier qu'il quiert, mes li sanble qu' il n'en voit mie, car il n'i voit nul tel escu com il porte...Li chevaliers que Misire Gavains quiert n'est mie au chief des rens,

ainz est en gregnor mesllee... Il voit le chevalier, si n'en conoist mie, car il avoit . i. blanc escu a conoissances autretex. 4398-4418行)

ここで語り手は「彼が探している騎士」という表現を使うことによって，読者にはそれがペルレスヴォーであるとわからせようになっている。しかも語り手はペルレスヴォーについては名前を使わずに「騎士」あるいは「もう一方の騎士」("li autres chevaliers", 4438行）で指示し，むしろゴーヴァンの方を名前で指示することによって語り手が物語をゴーヴァンの後ろに立って語っているような印象を読者に与えている。

このヴェルメル・ランドの騎馬試合の場面の前には読者自身がこのゴーヴァンと同じ立場にたたされる場面があった。それはペルレスヴォーが金色の盾をもって物語に登場する場面である。先にこの場面でまずペルレスヴォーが金色の盾を持った一人の騎士として提示されていることを見た。ここで問題となるのはその次の場面である。ゴーヴァンは宿をとった城の城主から，ある騎士を懲らしめて欲しいと頼まれ，その騎士について緑の十字の印のある金色の盾をもっていることを教えられる。二人の間の話が続く。そして「このようにゴーヴァン殿が城主に話していたところへ，金色の盾の騎士が現れた」("Issi com Misire Gavains parlloit au [va] vassor, atant ez vos le Chevalier a l'Escu d'Or," 4298行）と語り手は続けていく。校訂者のニッツェはここで<le chevalier a l'escu d'or>を名前として解釈して大文字を使って<le Chevalier a l'Escu d'Or>と表記している。しかしこの指示表現の意味するところは曖昧である。小文字のままで理解することも可能だからである。つまり，ジョゼウスを「隠者」と指示するように，何らかのコンテクストを前提とした表現であり，語り手がその前のゴーヴァンと城主の会話をうけて，「彼らが話題にしている騎士」ともとれるし，また初めにペルレスヴォーが金色の盾を持ってゴーヴァンの前に現れた場面と関係づけて「先に登場したあの騎士」と言う意味にもとれる。ニッツェのように名前（通称）として理解する時，それは物語の中でこの表現が明らかに名前として使われているのでない限り，物語で語られている状況とは関係なく語り手がそう名づけていると考えることになる。そうした解釈はどれとも限定できない。明らかなことは，ここで問題の人物がすでに読者には名もわかっている重要人物でありながら，作者があえて<le chevalier a l'escu d'or>という表現を使ってむしろペルレスヴォーであるとはわかりにくくしていることである。そしてこの表現を名前とするならばむしろそれまでまだ物語にでてきていない新しい登場人物であると読者に思われやすいことである。

定冠詞つきの表現が明らかに名前として物語中の会話で示されている場合がないわけではない。「臆病な騎士」の場合である。かれはまずゴーヴァンの前に「そこを行かれる高貴な騎士どの，神のために私にいかなる乱暴もしないでいただきたい。わたしは臆病騎士なのだから」("Gentils chevaliers qui la venez, por Dieu ne me fetes nul mal, car ge sui li Coarz Chevaliers." 1359行）と言って現れる。この騎士はそれからもたびたび物語に登場し，また他

の人物どうしの間で話題にもなるのだが，語り手も登場人物たちもかれをさして「臆病な騎士」という表現を使っている。のちにペルレスヴォーに促されて盗賊の騎士を倒す場面ではまず「私の名は臆病な騎士という」("j'ai non li Couart Chevalier" 5543行）と名乗っており，その戦いの後にペルレスヴォーから「どこででも自分の名前は勇敢な騎士であると言うのだ」("dites partot que vos avez non le Hardi Chevalier," 5611行）と新しい名前をあたえられる。そしてさらにのちに彼とアリストルの戦いの場にペルレスヴォーが駆けつけた場面では「かれは勇敢な騎士がアリストルを相手にしてこれほど長い間戦いをもちこたえていることをうれしく思った」("li fu molt bel de ce que li Hardiz Chevaliers tenoit si longuement mellee a Aristor" 8748行）とあるように，語り手はこの新しい名前を指示表現に使っている。

しかしまたニッツェの表記に従えば物語の中で，そして語り手によって「荷車の乙女」「まだらの騎士」(le Parti Chevalier)「狂気の城の奥方」などといった表現の使われている登場人物も多く，ペルレスヴォーの母については「寡婦の奥方」(la Veuve Dame）が使われ，ペルレスヴォー自身についても「優れた騎士」(le Bon Chevalier)という表現が使われている。固有名詞の名前（「ペルレスヴォー」や「ジョゼウス」）は語彙として，また限定詞がついていないことによってそれだけで名前として理解される，つまりその表現を使ってある人物を指示するときは，どんなコンテクストとも関係なく，話者にとって特定の人物を指示しているのであることが聞き手にもわかる。しかし，定冠詞つきの表現は話者がそれを名前として使うと意識している限りにおいて，つまりその表現を使う時はその話者にとってはコンテクストとは無関係にいつもある特定の人間を指示しているのだという意識がある限りにおいて名前なのであり，聞き手にとっては話者のそうした意図は明白ではないのである。したがって写本に出てくる記述表現を名前ととるかどうかはしばしば本来的に決定不可能なのである。

最後に指示表現としての固有名詞を見てみよう。代名詞がもっともコンテクストに依存した指示表現であるとするならば，固有名詞はそうしたコンテクストに依存しない表現である。 先にすでに指摘したように語り手が一方を固有名詞で指示し，他方を<l'ermite>という表現を使う時，読者は語り手の位置が固有名詞で指示される側にあるような印象をうける。冒険の場面の多くがそうしたパターンによって語られている。これと対照的なのが，この作品の後半でペルレスヴォーによる冒険と並行して語られる，アーサー王の宮廷を中心とする物語である。王国を脅かす敵マダグラン勢との戦い，ランスロに対するブリアンの陰謀などが内容である。たとえばアーサー勢とブリアン勢の戦いについてはまず，

> 王は大勢の騎士を率いてカルドゥイユを出発して馬を進め，ついにブリアンとその軍勢を目にした。ブリアンの方も彼の姿を目にした。("Li rois issi de Carduel a grant plenté de chevaliers, toz armez, e chevaucha tant q'il choissi Brien e sa gent, e Brien lui."

lans estoit arivez." 7993行)

という語りではじまるが，ここでは二つの軍勢の戦いが騎士たちの名前によって語られることになる。ここにはもはや登場人物たちとっても，また読者にとってもincognitoの状況はない。こうした語りでは読者は登場人物たちの上から見下ろしているような印象を受ける。この語りのスタイルは冒険物語(conte d'aventures) に対して歴史物語(histoire)として区別されよう。

ところでこの作品で面白いのは指示表現には使われることはないものの多くの人物の固有名詞の名前が挙げられていることである。しばしばある場面が終わったところでそこに登場していた二次的登場人物の名前が明らかにされる。

> ヨゼフスはこの物語を記録し，この有徳の人の名がカリクストであるとわれわれに言っている("Josephes de ceste estoire fet remembrance, e nos dit que cist preudom ot non Calixtes." 251行)

作者は固有名詞をしるすことによってこの人物が歴史上実在したかのような印象をあたえ，ひいては物語全体が歴史的事実であるかのように見せかける。そもそも「ヨゼフス」という名前，天使の告げるままにこの物語をラテン語で書き記したとプロローグで説明されている人物の名前に，作者のそうした執着が感じられる。

さらに面白いのは「狂気の城の乙女」(la damoiselle du Château Enragé) と呼ばれる人物の場合である。ペルレスヴォーが彼女の城の異教徒たちを殺し，彼女を改宗させるところまでは，語り手は彼女を指して「狂気の城の乙女」という表現を使っている。そしてこの場面を語り終わったところで

> 「ヨゼフスはこの物語で彼女がセレストルという名を与えられたと証言している。彼女は自分の洗礼をとても喜び，それまでの心を良い心に変えた。・・・ 乙女は善良で聖なる生活を送り，そして良きわざのうちに生涯を終えた」("Josefes nos tesmoigne en cest estoire qu'ele ot a non Celestre. Ele fist molt grant joie de son batisement, e mua son corage en bien. (...) La damoisele fu de molt bone vie e de molt sainte, e fina puis en mout bones oevres." 9154行)

と，その後の彼女の敬虔な生涯まで伝えている。ところがそれから少し読み進むと，彼女が改宗をとがめる騎士によって連れ去られたことがわかる。

> 「(彼は) 狂気の城の乙女を引き連れ，ときおり彼女を罵っていた」("amenoit aveques

lui la damoisele del Chastel Enragié, si la laidengoit d'ores a autres" 9320行)

この時の指示表現はまた「狂気の城の乙女」であり,「乙女」なのである。歴史の世界から冒険の物語に引き戻された時,「セレストル」は「乙女」に戻るのである。

冒険物語と歴史物語の二面性は,『ペルレスヴォー』に先行する二つの韻文聖杯物語,クレチヤン・ド・トロワの『聖杯の物語』(*Conte du graal*)とロベール・ド・ボロンの『聖杯の由来の物語』(*Roman de l'Estoire du Graal*)の二つの物語のスタイルを一緒に合わせたもののように見える。前者は主人公の母の名前や漁夫王の名についての言及もない,主人公の名前さえはじめのうちは明らかにされないような冒険物語である。後者は聖杯がまずキリストからアリマタヤのヨゼフに委ねられ,後に漁夫王へブロン(またはブロン)とその息子アランらの一行によって西方へもたらされるまでの歴史物語である。

作者はこれら二つのスタイルを一つの物語の中におさめることによってある意味では聖なるものにもっともふさわしい物語を書いたということができるのではないか。冒険の物語がincognitoの状況設定によって読者自身の冒険となるからである。読者もまたゴーヴァンと同じ不確かな世界に身を置きながらも,しかしまた他方では歴史を伝えるヨゼフスの声が聞こえるのである。

注

(1) Nitze et Jenkins (éd.), *Le Haut Livre du Graal: Perlesvaus*, 2 vols., New York, 1977 (Réimpression de l'édition de Chicago, 1932-1937).

(2) F.シュタンツェル『物語の構造』(前田彰一訳),1989年(原著 Stanzel, *Theorie des Erzählens*, Göttingen, 1979), pp.121-122.

(3) Corblin(Francis), "Les désignateurs dans les romans", *Poétique*, No.54, 1983.
ソール A. クリプキ『名指しと必然性』(八木沢敬,野口啓一訳),1985年.

(4) ヴァレリー・ラルボー『包丁』の例.

(5) "Pellesvax", "Pellesvax"のような異形もある. cf. Nitze, *Perlesvaus*, tome II, p.218.

(6) West(G.D.), *An Index of Proper Names in French Arthurian Prose Romances*, Toronto, 1978.

(7) Corblin, *op.cit*.